（インドネシア／デポック）
2025 年 9 月

インドネシアの高等教育機関における俳句（吟行句会）の教育実践
－日本語・日本文化教育での俳句の活用をめざして－

佐々木 幸喜（京都大学）
佐藤 文香（日本女子大学ほか非常勤講師）

１．プロジェクトの背景

１－１　なぜ俳句か

俳句は、異文化理解が促せる教材（友岡 1994 等）や日本語のリズムに触れられる教材（徳井 1997 等）であることに加え、書く力の向上（小林 2012 等）や読む力の向上（柴田・横田 2013）、語彙力の向上（水戸 2016 等）が期待できる活動として、日本語教育に取り入れられる機会も多い。一方、日本語教師に充分な俳句の知識がなく、日本文化の一つとしての紹介に留まる場合も多い（相場 2017 等）。

対して、報告者たちの強みは、日本語教育および日本文学の専門性を有する教師（佐々木）と俳句の専門性を有する作家（佐藤）とが共同で教育にあたることができる点である。佐々木は日本近現代文学を専門とし、勤務校では日本語教育に携わり、佐藤は俳人・詩人として実作しつつ、教育にも関わる。これまでも、佐々木の勤務校を中心に、俳句ワークショップを実施してきた。

2024 年 8 月、ICJLE においても俳句の教育実践について発表し[(1)]、日本語学習者の学習環境にも目を配り、汎用性の高い教材を作ることの重要性を感じるようになった。すなわち、《1》日本国外の教室環境、《2》日本国内の教室環境、《3》日本国内の自然環境、を区別して考えることの重要性である[(2)]。今回の活動は《1》での実践であり、今後の教材開発に活かすことを目指す。

１－２　なぜインドネシアか

本プロジェクトは、インドネシア大学人文科学部および同大学日本学研究センターの協力のもと実施した。インドネシア大学は、ジャカルタ首都圏[(3)]に本部を置く国立大学であり、日本研究を牽引する大学の一つである。日本語を学ぶ学生は、人文科学部日本学科に所属する。また、インドネシアは、日本語学習者数が約 73 万人おり（国際交流基金 2024）、その数は中国に次いで多い。今回の実践を、インドネシアにおける日本語学習者層の裾野をさらに広げ深める契機ともしたいと考えた。

２．本プロジェクトの目的

俳句を日本国外の教室環境に取り入れるに際し、歩いて句材を探し句作する「吟行」を実践の中心に据えた。これは、日本語俳句における標準的な「季語」が豊富に存在する日本を離れ、他国・地域でも吟行が可能かどうかを探り、日本国外の教室環境で学ぶ学習者とともに吟行をする意義や、日本での吟行と共通して学習できる点は何かを考えるためである。特に、実作者である佐藤が現地に行くことで作品の質や詩的アイディアを適切に評価することができ、学生の学習意欲を向上させることができると考える。また、実践の結果を踏まえ、教材パッケージの作成も目指す。

２－１　プロジェクトを進めるための準備

本プロジェクトを進めるにあたり、事前準備の一環として、インドネシアの教育事情に関する聞き取りを行った。聞き取りの対象は、日本語教育や日本研究に従事するインドネシア大学教員 3 人である。申請に先立つ 2025 年 2 月に佐々木が実施した最初の聞き取りでは、“日本文学の授業で韻文の実作を取り入れたい。そのために指導方法や評価方法を知りたい”という要望を得た。また、申請後に聞き取り・話し合いを進める中で、【学生が卒業後の進路で日本語をどのように使いたいと考えているかの把握に努める】、【インドネシアの他大学教員からも情報を得ることで、より充実した教材を目指す】という方針を定めた。そこから、「学生のニーズを知る場」としてインタビューを行うこと、ワークショップを「教員・学生が学ぶ場」と「学生が学ぶ場」の二部構成で行うこと、「教員同士が意見交換をする場」とし

てラウンドテーブルを行うこと、この三つの活動でプロジェクトをまとめていくこととなった。

３．プロジェクトの概要

３－１　プロジェクト全体のスケジュール

表 1 にスケジュール全体を示した。

表 1　全体のスケジュール

時期	活動内容
7 月 1 日	【採択通知】
7 月～9 月	現地協力者との打ち合わせ （7/11、7/24、8/7、9/8） ・活動内容 ・質問項目検討 ・説明書および同意書作成
9 月 14 日 ～ 9 月 17 日	現地渡航 ・授業見学 ・学生へのインタビュー ・ワークショップ ・基調報告 ・ラウンドテーブル ・教員との意見交換
9 月～11 月	調査データの整理と分析 報告書作成
12 月	報告書提出

３－２　渡航中のスケジュール

現地滞在は 4 日間であった。渡航中のスケジュールを表 2 に示す。活動は、主担当と副担当とに分け、専門性を十分に担保することを心がけた。［ ］内にある氏名が、主たる担当者である。

表 2　渡航中のスケジュール

9 月 14 日	
AM	現地到着
	現地協力者との打ち合わせ
9 月 15 日	
AM	授業観察
	学生への事前インタビュー
PM	ワークショップ①［佐藤］
9 月 16 日	
AM～PM	ワークショップ②［佐藤］
PM	教員との意見交換
9 月 17 日	
AM	学生への事後インタビュー
PM	基調報告［佐々木］
	ラウンドテーブル［佐々木］
	教員との意見交換
	現地出発

３－３　現地での活動内容

現地では、［1］学生へのインタビュー（事前・事後）、［2］ワークショップ、［3］基調報告およびラウンドテーブル、を中心に進めた。これは、2-1 で示した「三つの活動」となるものである。

［1］インタビューは佐々木が主担当、佐藤が補足質問をする方式で進めた。4 人の学部学生（4 年次 3 人、3 年次 1 人）に対し、日本語により、半構造化インタビューの形式で進めた〔写真 1〕。

〔写真 1〕

［2］ワークショップは、佐藤が担当した。二日に分け、一日目は、俳句のリズムや季語についてなど基礎的な講義であり、ハイブリッド形式にすることで、二日目の吟行句会参加者以外のインドネシア大学の学生・教員、また一般にも広く知ってもらうことを目指した。最終的に簡単な型をつかった句作に挑戦してもらい、Google Forms で約 80 人から回答を得た。

二日目は、インドネシア大学人文科学部日本学科の学部 3 年次を対象に行った。約 70 人を 10 班に分け、午前は広大なインドネシア大学の構内をグループごとに吟行、一人ずつ句作してもらった〔写真 2〕。午後はグループ内で作品を選び、代表者が発表、全体の中の一位を決定し、佐藤が随時コメントした〔写真 3〕。

〔写真 2〕

〔写真 3〕

［3］基調報告およびラウンドテーブルは、佐々木が担当した〔写真 4〕。日本文学を教育現場で扱う教員との意見交換が主となった。まず、佐々木が勤務校の日本語・日本文化教育においてどのような位置づけで日本文学を取り上げているか、また、どのように教材を作成しているかを報告し、そのうえで、インドネシアの大学での現状を共有してもらう形をとった。また、Google Forms によるアンケートへの協力を依頼し、コメント・質問に対する回答を、スプレッドシートで共有した。

〔写真 4〕

４．プロジェクトを通して得られた成果

ワークショップにおける第一の成果は、日本国外でも吟行句会が可能であるとわかったことである。日本とは違う季節感のなかで、自然や学生生活を通して得られたいきいきとした実感を、日本語にして表現することができた学生が多かった。第二に、佐藤の評価はもちろん、ピア活動により学生同士が評価し合うことで、理解が深まった様子が観察できたことも大きな成果となった。

ラウンドテーブルにおける第一の成果は、ジャカルタ首都圏の高等教育および日本語教育の事情に触れられたことである。教材作成に際し、それらを意識することの必要性を感じた。第二に、日本文学教育で扱われる韻文に、ある種の傾向があることがわかったのも大きな成果である。

５．今後に向けて

まずは、教材パッケージを完成させ、本プロジェクトの成果物としてまとめる。それらは、researchmap や Web サイト等を通じての公開を予定している。また、俳句以外の形式の詩をどのように教育に取り入れるのがいいか、引き続き、インドネシア大学教員にも協力を得ながら進めていきたい。さらに、アジア以外の地域も視野に入れた活動も探っていきたい。

注

（1）佐々木幸喜・佐藤文香（2024）「日本語・日本文化教育における吟行句会の活用」2024 年日本語教育国際研究大会（ICJLE2024）2024 年 8 月 1 日-3 日　於：ウィスコンシン大学マディソン校

（2）迫田ほか編（2020）の議論を参照した。参考文献（3）を参照のこと。

（3）ジャカルタ首都圏は、ジャボデタベック（Jabodetabek）とも呼ばれる。その名称は、当該圏を構成する都市名の頭文字から付けられている。当該圏を構成するのは、Jakarta（ジャカルタ）、Bogor（ボゴール）、Depok（デポック）、Tangerang（タンゲラン）、Bekasi（ブカシ）。インドネシア大学の所在地は、デポック。

参考文献

（1）相場いぶき（2017）「日本語クラスにおける「俳句ワークショップ」の実践報告と考察：俳句が学習者にもたらすものと教師にできること」『日本語教育方法研究会誌』23(2), 64-65.

（2）小林可奈子（2012）「俳句学習の可能性」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』10, 23-37.

（3）迫田久美子ほか編（2020）『日本語学習コーパス I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』くろしお出版

（4）柴田節枝・横田淑子（2013）「日本語学習者のための日本文学：俳句と短歌を教材とした日本語読解活動の実践報告」『Journal CAJLE』14, 31-53.

（5）徳井厚子（1997）「留学生に俳句を教える：日本語・日本事情教育の中で」『信州大学教育学部紀要』90, 1-7.

（6）友岡純子（1994）「異文化理解と季節感：俳句を教材にした日本事情の授業」『言語文化と日本語教育』7, 37-47.

（7）水戸淳子（2016）「日本語学習者による俳句・川柳の創作活動」『2016 CAJLE Annual Conference Proceedings』, 198-201.

（8）国際交流基金（2024）「2024 年度 海外日本語教育機関調査 結果概要」〈https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/information.html〉（2025 年 10 月 22 日）